

みどりと指切り

鈴木 知英子 奈良県香芝市 八十四歳

滴るようなみどりの下で、私たちは小さな指切りをしました。その日から毎日お昼休みには、石畳の坂道を登って、おきまりの場所でお弁当を食べました。「白いご飯がみどりのご飯になるみたいだ」とあなたはおっしゃいました。

「女の子が生まれたら『みどり』という名前にしよう」また小さな指切りをしました。女の子が生まれましたが「みどり」という名をつけることはできませんでした。当時は「子どもの名をつけるのはおじいちゃん」というしきたりみたいなのがあったのです。

結婚して六十年が過ぎました。「あの城跡のみどりを見に行こう」「とても無理だよ」「車いすでなら行けるわ」病院の一室でまたまた小さな指切りをしました。

「城跡の公園のあの東屋、今もあるかなあ」「みどりの枝が屋根を覆っているかもしれないね」

春のお彼岸、新緑の頃を待たずにあの人は逝きました。力のない小指で、それでも精いっぱい指切りをしたまま静かに逝きました。かすかにほほえんでいる気がしました。

あの人の頭の中を、城跡のみどりがいっばいにあふれているのかもしれないと思いました。